

検証 大学入試にいったい何が起きようとしているのか？

連呼されるだけの「4」

二〇一七年の七月、メディアに一齐に流れたニュースを覚えている方も多いでしょう。新聞などの見出しにはこんな文句が踊りました。

「センター試験後継テストの英語、完全民間移行は24年度」〔朝日新聞〕7月10日

「2020年度から大学入試はこう変わる」〔日本経済新聞〕7月10日

「大学新テスト、実施方針を決定 英語は今年度中に民間試験認定へ」〔産経新聞〕7月13日

「ミサイルが飛んできた」とか「国会議員が賄賂をもらった」といった記事とはちがいが、メディアはおおむね「ほお。そうですか」といった姿勢でした。記事本文も「英語はコミュニケーション

ション能力を重視し、「読む・聞く」の2技能だけを測っていた試験を廃止し、4技能を測るため英検やTOEICなどの民間試験を使うことになる」〔朝日新聞〕という程度の書き方です。よく読むと反対意見も出たらしいことはわかるのですが、記事のニュアンスは、「んー。何だかよくわからないけど、ま、いいのかな」というようなもの。「4技能」と言われてもよくわからないけど、目新しいし、なぐんとなくいいかも、といった気分がメディアを覆っていました。

しかし、実際に入試を受ける受験生やその保護者はたいへんです。よくわからない方法であるほど、不安は増す。その不安を助長するように、塾業界はわざわざ「これから入試が4技能に変わる！ さあ、たいへん。あなたは自分では対策ができません。是非、当塾で対策を！」といった広告を打ち始めました。

では「4技能」とはいったい何なのでしょう。いったい何がよくなるのでしょうか。

しかし、残念ながら今回の「4技能」という看板にはほとんど実態がありません。調べれば調べるほど、今回の政策がいかに無根拠に進められているかが明白になります。それどころか、そのほんとうの目的は一部業者のための経済効果にあるようにさえ見える。しかもこの政策のために、肝心の英語力は今よりもっと低下する可能性がきわめて高いのです。

そもそも「4技能」とは英語を「読み、書き、話し、聞く」という能力のことを指します。それぞれの技能に焦点をあてて訓練するという方法はるか昔から行われてきました。しかし、実際には読むことと書くこと、あるいは読むこととしゃべることとを厳密に区別して訓練してもあまり大きな意味がありません。たとえば単語一つとっても、実際に言葉を使うときには、単語の意味を

理解し、口にし、また聞き取れる、ということがあたりまえのように行われています。なので、これまでの英語教育では、4技能という視点は当然のように踏まえつつ、状況に応じて力点を変えながら学習を進めるという方法がとられてきました。センター試験でも、それぞれの技能を組み合わせた問題が出題されています。二〇一七年度の例で言えば、全問題の半分ほどが、いわゆる会話文を素材にしています。「読解ばかり」などという批判は的外れ。「2技能しか測っていない」というのも「ウソ」です¹⁾。

つまり、ある程度英語教育のことがわかっていている人なら、「え？ 何でいまさら4技能？」と思うわけです。「どこが新しいの？」「みんなずっとやってきたでしょ？」と考える。

ところが、「4技能」というこの古い用語が、突然、持ち出され何か新しいものであるかのように脚光をあびることになった。二〇一二年から二〇一三年にかけてのことです。ちょうど入試にTOEFLの導入を、という提言を経済同友会がして物議を醸したところです。同じ頃、受験業界のタレント講師として知られる安河内哲也^{やすこうち}さんは、当時の下村博文文科大臣の命で「有識者会議」のメンバーとなり、「4技能推進」を謳う「実用英語推進機構」の代表理事に就任しました。安河内さんはこのころから「4技能主義の伝道師」として活動することになります。

しかし、著作リストを見ればわかるように、安河内さんがこれまで書かれてきたのは入試の長文読解など受験テクニックを伝授する本ばかり。膨大な著書があるわりに、それまでこの「4技能主義」の推奨をしたこともないし、4技能でしばしば話題になるスピーキング関連の著作も皆無でした。その後の活動を見ても、「4！4！」と連呼するだけで、彼の言う「4技能」とこれまでの

英語学習の何が違うのか、何が新しいのかは見えてきません。ほとんどカルト教団の教えのような意味不明さです。なので、本書では、従来の「4技能主義」とは区別する意味もこめて、ここ最近台頭したこうしたかけ声ばかりの4技能礼賛を「ネオ4技能主義」と呼ぶことにします。

実態のない「ネオ4技能主義」には、どこか得体の知れない軟体動物のようなどころがあります。その推進者の一人である松本茂さんの発言がその典型なのですが、都合のいいときは「4技能」を唱え、都合が悪くなると「4技能ではいけない」というように豹変します。支離滅裂なので、いったい何がしたいのか、何を狙っているのか、英語にかかわっている人たちにもよくわからないし、ましてやその外にいる一般人の人、受験生やその保護者にはブラックホールのような巨大な虚無にしか見えません。

なんで外部試験？

しかし、ネオ4技能主義には一つだけ明確な目的があります。大学入試への外部試験の導入です。毎年五〇万人を超える受験生が受験するセンター試験。これを業者に委託するという。要するに入試の民営化です。そこには新しく大きな市場が生まれるでしょう。その経済効果は莫大。ゆくゆくは国立大学の二次試験を全廃して、すべて民営化しよう！という案も出ています。しかし、大学教育も大学入試もきわめて公共性の高い事業です。その土台を、得体の知れない「ネオ4技能主義」にまかせていいのでしょうか。

現在出されている案としては、受験機会は複数化されるとのことです。試験を年に何度も受け